

『宇治拾遺物語』における死亡表現について

——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法——

高 橋 敬 一

一、はじめに

『宇治拾遺物語』（以下、『宇治』と略す）における死亡表現の主たるものは、和語動詞「死ぬ」（八六例 用例数は『宇治拾遺物語総索引』による。⁽¹⁾以下同じ）および「失す」（二七例）である。それに若干の漢語サ変動詞「死す」（四例）が混在する。

『宇治』におけるこれら死亡表現動詞「死ぬ」「失す」「死す」三語間には、意味・用法上に相違が認められ、三語は明確に使い分けられているようである。そこで、本稿では、それぞれの語が担う用法上の役割を明らかにしたいと思う。このことに関しては「死ぬ」と「失す」および「死ぬ」と「死す」に分けて考察することとする。また、「死ぬ」と「死す」については、語認定の問題⁽²⁾が残っているので、その解決の糸口もあわせて探ってみたいと思う。テキストは、「古活字本」を用い、適宜、「陽明文庫本」および「写本二冊本」とを校合させることにする。⁽³⁾

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法

二、「死ぬ」と「失す」

『宇治』には、「死ぬ」と「失す」が同一説話中に併用されている説話が四話存する。それは次の通りである（用例文の引用は、「古活字本」の本文で示す。以下同じ）。

①「をのれが親の(a)失侍しおりに、世中にあるべき程の物などえさせ置きて、(略)この女のおやの、(略)しかいひをしへ、(b)死ける後にも、この家をもうりうしなはずして」(第八話)

②「をのれが親は、百二十にてなん(a)うせ侍にし。祖父は、百三十ばかりにてぞ(b)うせ給へりし。(略)へ年八十斗なる女へふもとに侍る身なれば、山崩なば、うちおほはれて、(c)死もぞすると思へば、(略)これをあざけりわらひしものどもは、みな(d)死にけり」(第三〇話)

③「敏行といふ歌よみは、(略)俄に(a)死けり。われは(b)しぬるぞとも思はぬに、(略)これをきくに、(c)しぬべき心ちす。(略)我は(d)死たりけるにこそありけれと心得て、(略)このうけたりける齡、かぎりになりにけん、つるに(e)うせにけり。(略)其経をかゝらずして、ついに(f)うせにし罪によりて」(第一〇二話)

④「唐に、なにかやいふ司になりて、下らんとする者侍き。名をば、けいそくといふ。それがむすめ一人ありけり。(略)十余歳にして(a)うせにけり。(略)その母が夢にみる様、(b)うせにしむすめ、青き衣をきて、(略)へけいそくへ

病になりて(d)しにければ、ゐ中にもくだり侍らずなりにけり」(第一六七話)

これらの「失す」の用法をみると、死亡者(文中に波線を引いた人物)が、説話の主人公に対して、①(a)・②(a)は「親」、②(b)は「祖父」であり、④(a)(b)は「娘」という関係にある。

それに対して、③(e)(f)の場合は、死亡者が説話の主人公敏行自身であつて、「死ぬ」(あるいは「死す」の可能性もあることは、後述する)との使い分けはなされていまいように見える。ところが、この説話(第一〇二話)を詳細にみると、次のようなことがわかる。

すなわち、③(e)の場面は「蘇生」した敏行が「妻子」と語らい、改心を誓うが、結局は、自身の悪行によつて再び死ぬという場面である。一方、③(f)の場面は、歌人紀友則の夢の中に現われた敏行が、歌の「師友」である友則に、自身の悪行を恥じて改心し、「蘇生」を願う場面である。つまり、③においては、主人公敏行の死を「死ぬ(死す)」と表現した(a)(b)(c)(d)が、敏行の死を語り手・主人公自身の視点で客観的にとらえた表現になっているのに対して、(e)(f)は、敏行の死を「妻」や「師友」の視点でとらえ、「失す」と表現していることになるのである。

このような同一説話中における視点の移動という観点でみると、右の①(a)(b)についても、つまり主人公の「親」の死表現にもかかわらず、「死ぬ(死す)」と「失す」が用いられていることの理解ができるように思われる。

ここで、『宇治』における、その他の「失す」の用例すべてについて、同じように主人公と死亡者の関係でとらえ直してまとめてみると、次表のようになる(表中には、右の用例も含めて表示する)。

主人公	主人公の肉親	死亡者	説話番号
〈僧〉 〈聖〉 〈殿〉	〈祖父〉 〈親〉 〈妻〉 〈子〉 〈兄弟〉		第30話 第8話・第30話・第77話二例・第108話四例・第186話。 第59話・第77話 第140話・第168話二例 第41話・第47話
第82話 第7話・第58話 第84話二例・第102話二例・第146話・第187話・第191話			計
10例	17例		

表の中で、主人公〈殿〉の死亡表現の項の中に入れた第一八七話について、説明を付け加えておく。
 この説話の題目は、「頼時が胡人みたる事」とあるように、主人公は頼時である。この説話の冒頭部分と結語部分を次に引用してみる。

今は昔、胡国といふは、唐よりもはるかに北ときくを、陸奥の地につゞきたるにやあらんとて、宗任法師とて、筑紫にありしが、かたり侍けるなり。この宗任が父は頼時とて、(略)
 さていくばくもなくぞ、よりときは失にける。されば胡国と日本の東のおく地とは、さしあひてぞあんな

ると申ける。(第一八七話)

このように、この説話は、他の説話の構成といく分趣きが異なっており、語り手が作中人物でもあり、しかも死亡した頼時の子、宗任法師自身である。そのため、説話の主人公頼時の死を「失す」と表現したものである。

同じく、主人公〈殿〉の死亡表現の項の中に入れた第一〇二話の二例の「失す」は、先にみたように、語り手の視点に移動がみられ、主人公自らの死でありながら、「失す」が使われている例である。あるいは、この例と同じように、主人公〈殿〉〈聖〉〈僧〉の項の中に入れた、第一九一話・第七話・第八二話のそれぞれの主人公の死に対して、「失す」が使われているのは、その主人公達に対する「師友」の情とも言うべき視点から、その死を哀惜する表現として選択されたのではないかと推測できる。その他二例については一応保留としておく。

次に、「死ぬ」の用法の中にも、右に見たような「失す」の主たる用法、すなわち、主人公の「両親」や「妻子」など、肉親の死に対する死亡表現として用いられる用法と同じものがあるのではないか、ということについて考察しておく。

「死ぬ」の全用例の中、主人公の肉親の死を扱ったものは次の四話である。

〈両親〉

①「この女のおやの、(略) しかいひをしへ、死ける後にも」(第八話)

〈妻〉

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法

①「王のたまふやう、「汝が子をはらみて、産をしそなひたる女死にたり」(第八三話)

〈子〉

①「あづまの人、「さて、その人は、いま(a)死たまひなんずる人にこそはおはすれ。(略)その女君を、みづからにあづけ給ふべし。(b)死給はんもおなじことにこそおはすれ。(略)「げにまの前に、ゆゝしきさまにて(c)しなをみんよりは」とて、(略)父母のいふやうは、「身のためにこそ、神も仏もおそろしけれ。(d)しぬる事なれば、今はおそろしきこともなし」(第一一九話)

②「今は昔、遣唐使にて、もろこしにわたりける人の、(略)子をば(a)しなせたれども(略)子(b)しにければ、なに、かはせん」(第一五六話)

〈両親〉①は、「失す」と併用された例として先に見たように、語り手の客観的表現と思われる。〈妻〉①は、閻魔王(実は、地藏菩薩)とその夫藤原広貴との会話中に現われており、大王による客観的表現と解される。〈子〉①(a)(b)(c)(d)は、年祭の「生贄」として捧げなければならなくなった娘であるが、それを両親や東人が第三者的立場に立って表現しているものと解される。また〈子〉②(a)(b)は、虎のために「食い殺さ」れてしまった子のことを、父親の視点からではなく、語り手の視点で客観的に表現したものであると思われる。

以上、分析の結果をまとめてみると、次のようになる。すなわち、『宇治』における「失す」の主たる用法が、主人公の肉親の死を主人公の視点からとらえた表現になっているのに対して、「死ぬ」は、語り手(あるいは作中人物の場合もある)の視点で、その死を客観的にとらえた表現であると言ふことになる。

さて、このことは、『今昔物語集』との共通説話を比較して得られる、次のような結果からもうかがわれる。すなわち、『今昔物語集』において、『宇治』と対応する個所が「死ぬ」と表現されているのに、『宇治』の該当個所では「失す」となっているものがある。用例を次に掲げておく（『今昔』の本文は、岩波古典文学大系本による）。

① をのれが親は、百二十にてなんうせ侍にし。祖父は、百三十ばかりにてぞうせ給へりし（第三〇話）
己レガ父ハ百廿ニテナム死ニシ。祖父ハ百州ニテナム死ニシ（卷十第三六話）

② 供養したてまつりなどして、いくばくもへぬ程に、父うせにけり。それだに思ひなげくに、引つゞくやうに、母もうせにければ（第一〇八話）

供養シテ後チ、幾ク不経シテ父死ニケリ。娘、此レヲ思ヒ歎ケル間ニ、程无、亦、母モ死ニケリ（卷十六第七話）
③ 十余歳にしてうせにけり。父母、泣きかなしむことかぎりなし。（略）その母が夢にみる様、うせにしむすめ、青き衣をきて（第一六七話）

而ルニ、幼クシテ死ヌ。父母、此ヲ惜ミ悲ム事无限シ。（略）其ノ母、前ノ夜ノ夢ニ、死ニシ娘、青キ衣ヲ着テ（卷九第十八話）

④ さていくばくもなくてぞ、よりときは失にける（第一八七話）
其ノ後、幾ノ程モ不経シテ、頼時ハ死ニケリ（卷三十一第十一話）

これら①から④の用例はすべて、祖父・父母・子と主人公の肉親（④については前述した）の死を述べた場面である。このように『今昔物語集』の共通説話の比較の結果からも、『宇治』における「失す」が、前述したような新しい意味範疇を確保し、「死ぬ」と用法上、その役割を分担していることがわかる。

三、「死ぬ」と「死す」

『宇治』には、「死ぬ・死す」の用例が全体で九〇例存する。「古活字本」における、これらの語を活用形ごとに整理（「死ぬ・死す」に承接する最初の助詞・助動詞によって分類する）すると次のようになる。ただし、以下の考察の都合上、〈連用形〉のみ別表にまとめる（表中の数字は、用例数を示す）。

〈表Ⅰ〉

漢字表記	未然形	終止形	連体形	已然形
死な—む	6	死ぬ—べし	4	
			死ぬる—体言 死ぬる—に	1 1

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法

〈表Ⅰ〉〈表Ⅱ〉をみて、わかるように「死ぬ」と「死す」の認定で問題となるのは、〈表Ⅱ〉に示した「死―け

	死―給ふ	
	4	
	死―侍り	
	3	
		しに (中止法)
		1
		しに―に
		1

死す		死ぬ
	死―けり	死に―けり しに―けり
	7	3 6
しし―たり	死―たり	死に―たり
1	6	1
	死―ぬ	
	4	
しし―て	死―て	
1 1	2	

〈表Ⅱ〉 (連用形)

仮名表記			
しな―む	しな―ず	しな―す	しな―ば
2	1	1	7
しぬ	しぬ―べし	しぬ―べかり	しぬ―とも
1	3	8	1
しぬる―体言	しぬる―やらん	しぬる―ぞ	
1	1	4	
しぬれ―ば	しぬれ―ども		
	1	3	

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法

り」「死―たり」「死―ぬ」「死―て」「死―給ふ」「死―侍り」の六種類である。これらは、『宇治拾遺物語総索引』ではすべて和語動詞「死ぬ」の連用形「シニ」と読まれている。ところが、表からもわかるように、動詞「死ぬ・死す」が助動詞「たり」（全八例）および助動詞「て」（全四例）に接続する場合には、「死す」が付いた例も存するのである。

助動詞「たり」および助動詞「て」に接続した用例は次の通りである。尚、引用文中に波線を引いた人物（動物）が死亡者（動物）である。

「死に―たり」

①「王のたまふやう、「汝が子をはらみて、産をしそこなひたる女死にたり」（第八三話）

「死―たり」

①「此厚行、とぶらひにゆきて、（略）「この(a)死たる親へ隣人」を出さんに、（略）吾こどもに云やう、「隣のぬしの(b)死たる、いとほしければ」（第二四話）

②「妻子なきあひける二日といふに、（略）さは、我へ敏行朝臣」は死たりけるにこそありけれと心得て」（第一〇二話）

③「その草の葉の、かへるの上にかゝりければ、かへる、まひらにひしげて、死たりけり」（第一二七話）

④「かたみにきり合てへ三人の盗人」死たるかと思れば、おなじたちのつかひさま也」（第一三三話）

⑤「弟子の僧、いきたるにもあらず、死たるにもあらずおほえけり」（第一七四話）

「しし―たり」

①「今は昔、せいとく聖と云聖のありけるが、母のしゝたりければ、ひつぎにうちいれて、たゞひとりあたごの山にもてゆきて」(第一九話)

②「人々心みさせたりければ、「ことの外に侍けり。へ雉子しゝたるおろして、いりやきしたるには、これはまさりたり」(第五九話)

「死して」

①「此専当法師、やまひつきて、命おはりぬ。(略)死て六日といふ日の末の時ばかりに、にはかに、此くはんはたらく」(第四六話)

②「是も今は昔、藤原広貴といふ者ありけり。死て閻魔の庁にめされて、王の御前とおほしき所に参りたるに」(第八三話)

「しして」

①「つまのうたへ申心は、「(略)かれが子を産そこなひて、死して地獄におちて、かゝるたへがたき苦をうけ候へども」(第八三話)

②「谷の底に、大なる狸、むねよりとがりやをいとをされて、しゝてふせりけり」(第一〇四話)

右の用例の中で、まず、漢語サ変動詞「死す」の用例(「ししてたり」①②、「しして」①②)から検討することにする。『宇治拾遺物語総索引』(「古活字本」)では、「死す」はこの四例のみである。ちなみに、「陽明文庫本」および「写本二冊本」では、この四例の中の一例のみ(右の引用例中の「死して」①のみ)は明らかにサ変動詞

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法

と解されるが、他の三例は、「死—たり」二例、「死—て」となっており、どちらかの判断がつかない。その他、サ変動詞と解されるものはない。

「古活字本」の四例を検討してみると、これらには、次のような特徴がみられる。

「しし—たり」①の用例は、清徳聖が、死んだ母を棺に入れて供養していたが、三年たったある日、その母が「蘇生」して、自分自身が成仏できたことを息子の聖に知らせたことから始まる内容の説話。「しし—たり」②は、動物（雉子）の死。「しし—て」①は、地獄に落ちて苦しんでいる妻をみて、改心した夫が「蘇生」する話。「しし—て」②は、動物（狸）の死。

すなわち、『宇治』における「死す」の用法は、(1)蘇生譚の中で用いられる。(2)動物の死表現として用いられる。という二点にまとめることができる。

すると、「死ぬ」か「死す」か存疑とした右の諸例の中、第四六話（「死—て」①）、第八三話（「死—て」②）、第一〇二話（「死—たり」②）の三話は、それぞれ主人公専当法師、藤原広貴、敏行朝臣が蘇生する蘇生譚である。また、第一二七話（「死—たり」③）は、動物（蛙）の死を表現したものである。これらは、漢語サ変動詞「死す」と認定してよいと考える。

ところで、「死ぬ」の用例の中には、蘇生譚（第一〇二話）にもかかわらず、「死ぬ」が用いられていると思われるもの、あるいは、動物の死（第九六話、第一五五話、第一九六話）にもかかわらず、「死ぬ」が用いられているものが存する。これについて検討しておく。用例は次の通りである。

〈蘇生〉

①「是も今は昔、敏行といふ歌よみは、(略)かゝる程に、俄に(a)死けり。われは(b)しぬるぞとも思はぬに、俄にからめて引はりて、(略)身もきるやうに、心もしみこほりて、これをきくに、(c)しぬべき心ちす」(第一〇二話)

〈動物〉

①「このむま、にはかにたふれて、たゞしに、しぬれば、(略)このおとこみて、この馬、わが馬にならんとて死ぬるにこそあんめれ。(略)けふかくしぬれば、(略)いみじき御むまかなと見侍りつるに、はかなくしぬる事、命ある物はあさましきことなり」(第九六話)

②「この男の云やう、「あの虎にあひて、一矢を射てしなばや。虎かしくくば、共にこそしなめ。(略)つるにはそのどくのゆへにしぬれども、(略)日本の人は、我命しなんをも露おします」(第一五五話)

③「鮒の云、「我は、(略)喉かはき、しなんとす。われをたすけよと思て、よびつる也」といふ」(第一九六話)

『宇治』における死亡表現を考える場合、第一〇二話(〈蘇生〉①)は面白い説話である。すなわち、この説話の中には、主人公敏行朝臣の死を場面・状況に応じて、「死ぬ」三例、「死す」一例(前述)、「失す」二例(前述)と使い分けているように思われるのである。すなわち右の用例の中、(a)「死けり」は、漢語サ変動詞で読むべきかどうかは判断がむづかしいが、「シシケリ」の接続が他に見あたらないので、一応従来通り「シニケリ」と読んでおく。(b)(c)は、主人公の心話表現中のもの(自身の死)であるので、「死ぬ」が用いられたものと解される。

〈動物〉①②③の中で、②は、虎退治の方法を述べている個所であるので、虎の死を客観的に表現したものとみることが出来る。③は、鮒が擬人化されており、その鮒の発言部に用いられている。このように解すれば、この二個

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法

所の場面で「死す」ではなく「死ぬ」が用いられていることは理解できる。①については、存疑としておく。

四、おわりに

『宇治拾遺物語』における死亡表現動詞「死ぬ」「失す」「死す」の意味・用法上の相違を明らかにすべく稿を起した。その結果は、これら三語の使い分けの基準は、用法上の使い分け（意味特徴の差異）基準によるのではないかということである。

それは、次のような基準であった。

(1) 「死ぬ」は、説話の語り手あるいは主人公自身（心話表現中の場合）が、人間・動物の死を問わず、その死を語り手の視点で客観的にとらえた表現にする場面に用いる。

(2) 「失す」は、説話の主人公の肉親の死を主人公の視点でとらえた表現の場面に用いる。また、主人公自身の死の場合は、それとは反対の視点（肉親・師弟関係の場合など）でとらえなおされた表現となる。

(3) 「死す」は、人間の場合は、蘇生説話（蘇生譚）の中だけで語り手の客観的な死亡表現として用いられる。あわせて動物の死表現としても用いられることがある。

尚、和語動詞「死ぬ」と漢語サ変動詞「死す」の使い分けは、文体の違いによるのではないかという推測も成り立つかと思うが、『宇治』においては、そのような傾向はみられなかった。語彙面における、いわゆる和漢混淆の姿とみるべきかどうか、今後とも調査を続けてみたい。

注

(1) 岩波古典文学大系本を底本とする。清文堂出版発行(昭和62年)。

(2) たとえば、岩波古典文学大系『今昔物語集(一)』補注(四二六ペ)に次のようにある。

本集における死亡表現の最も普通なるは、いうまでもなくシヌであるが、それに比してシスは漢語に基くが故に何程か生硬な感を禁じ得ない。(略)文脈上、どうしてもサ行三段(変格)でよむべきものはシス(その変化をも含む)とよむことを建前とすべきではあるが、サ行変格の語感の余りすぐれないと考えた場合は、つとめてナ行変格でよむ原則に従った。

(3) 「古活字本」とは、宮内庁書陵部蔵無刊記古活字本(岩波『古典文学大系』27・小学館『古典文学全集』28)の略。

「陽明文庫本」とは、陽明文庫蔵本(岩波『新古典文学大系』42)の略。

「写本二冊本」とは、宮内庁書陵部蔵写本上下二冊本(『笠間影印叢刊』46)の略。

『宇治拾遺物語』における死亡表現について——動詞「死ぬ」「失す」「死す」の用法